

書評:

ピーター・ジャーヴィス編著、渡邊洋子・吉田正純監訳
『生涯学習支援の理論と実践―「教えること」の現在』

上 杉 孝 實

Book Review:

Peter Jarvis (ed.), The Theory and Practice of Teaching

Takamichi UESUGI

本書は、Peter Jarvis (ed.), The Theory and Practice of Teaching, 2nd edition, Routledge, 2006の訳本である。ピーター・ジャーヴィス教授は、成人教育や継続教育についての研究者で、長年イギリスのサリー大学で教鞭をとり、教育研究部(Department of Educational Studies)の中心メンバーとして、部長(Head)も務めた。イギリスの大学では、多くは教育学部(Faculty of Education)、ウォーリック大学などでは教育研究学部(Faculty of Educational Studies)の中の教育部、構外教育部、成人教育部あるいは継続教育部で成人教育・継続教育の実務家の教育と研究が行われてきたが、サリー大学は、1966年にそれまでの上級技術カレッジから大学になった比較的新しい大学であり、人文学部(Faculty of Human Studies)の中に教育研究を正面から打ち出した部を設けて、教育に関する研究、とくに成人教育・継続教育研究に重点を置いて取り組んできた。現在はその部はなくなったが、本書は、その当時の部の主要メンバーによって執筆されたもので、義務教育後の継続教育(成人教育を含む)や高等教育の教員を対象に、ティーチングについて書かれたものである。

日本でも、大正期の自由教育以後「学習」概念が重視されるようになったが、とくに社会教育では学習者の主体的取り組みを重視してきた。しかし、「教育」をこれに對置することは適切ではない。教育は学習の援助を意味するが、それは常に他人によつての援助だけではなく、自己教育の語もあるように、みづからが計画的に学習を組み立て学ぶことも含まれるのである。このように教育は、学習をコアとする概念で、学習を計画し進めることである。ティーチングは、教育の一方法であり、通常学習者とは別の人によつてなされる行為である。その点で、学習と對置され得る概念である。

近年、生涯学習概念の広がりもあり、教育というべきところまで学習という語があてられている例も見られるように、概念の混乱が少なくないだけでなく、教育を否定的にとらえるような現象さえ見られる。イギリスでも、生涯学習概念がよく用いられるようになっているが、そこには、欧米で教育というと学校型の教育が連想されやすいことは、社会教育概念のある日本以上であることがあって、様々な場での教育を捉えるためにも、学習概念のクローズアップが必要であったのである。とはいえ、学習には試行錯誤的な偶然の学習も含まれ、それでは豊富な知識を身に着けたり、応用したり、それを糧として創造したりということが容易でないから、

効果的な学習に至る教育が欠かせないのである。

その意味でも、教育の重要部分であるティーチングと学習の関係を再確認することが現代的課題である。本書では、教育が学習中心に考えられるようになっている今日、ティーチングの持つ意味やその機能をあらためて検討するものである。第Ⅰ部は、ティーチングの理論的諸問題を考察するもので、「変動する世界の中で『教えること』とは」「教えること—わざか科学（テクノロジー）か？」「『教えるスタイル』と『教える方法』」「倫理と『教えること』—教える者と教えられる者の関係性の探究」「ラディカル教育学とフェミニスト教育学」の5章から成る。ここでは、学習社会論の文脈でたえずの学習が焦点となったこと、その背景にリスク社会や消費社会があること、そして、知そのものが変化し続ける状況にあることが示されている。それゆえ「教えること」も知の伝達というよりも学ぶための機会の提供であり、科学としてだけでなく「わざ」として人と人との関わりの中で機能するものであることが論じられている。その典型は、批判的教育学に見られるのであり、抑圧からの解放に向けて学習者自身の連帯による考えの発展に、対話を通じての参加が課題となるのである。マルクス主義のとらえ方にポストモダンの影響が増して、知の変動に着目するとともに状況に埋め込まれた権力を意識するのである。

第Ⅱ部は、教える方法について考察したもので、多様な方法を取り上げ、今日的意義について検討を加えていて、「講義/講義すること—『教えこみ主義』を再考する」「ソクラテス法」「ファシリテーションとファシリテーターのスタイル」「経験的教育の諸原理」「『教えること』『学ぶこと』に関わる経験的方法」「実践基盤学習と課題基盤型学習（PBL）」「メンタリング—『教える』わざ・学ぶ『わざ』」「学習コミュニティー『教えること/学ぶこと』の学習方法論的な次元とは？」の8章から成る。ポストモダン社会にあっては、講義の拠っていた権威にもゆさぶりがかかって、一方向的なものの限界が大きくなっている。そこから、対話や集団での討議などが注目され、その状況設定が課題となるのである。もともと成人教育では経験的教育が重視され、感情的経験や創造的経験も結び付けながら、批判的・省察的科学も関わることによって、解放的知につながることが考えられている。経験的方法としては、身体的活動を伴っての作業や表現、エンカウンターやグループワークなど集団での交流における自己認識の発展、イメージによる創造的エネルギーの活性化などがあげられる。実践知に着目するとき、実践は理論の応用としてあるのではなく、実践のあとづけとして理論があることが示唆され、このことから職業教育等において、実践的な課題を提起しての学習の意義が論じられている。その際、計画的に行われる批判的な振り返りを伴ったメンタリングが有効であることが示されている。共同体をなして学ぶこと、とくにピア・コミュニティ学習のように、学習者が相互作用を通じて学ぶことは、全人的な教育にもつながるが、秩序を求めると活性を損なうこともあることが指摘されている。

第Ⅲ部は学習の評価査定について検討するもので、「義務教育以降の教育における評価査定」「高等教育における経験的学習の評価査定」「放送・遠隔学習による学習者の変容」「『教えること』の専門職化」の4章から成る。評価査定そのものが学習のポイントを明らかにし、その達成状況を把握することでティーチングにつながるものであり、その意味で形成的評価査定が重

要になることが述べられている。また、自己評価や相互評価が主体的な学習を促進するのであり、成人教育にあってはノールズが提唱した学習契約の構築との結合が大きな意味を持つことが語られている。放送・遠隔学習では対面的な教育が困難になるが、仲間や教師との議論をファシリテートすること、相互作用型メディアを活用することなどを勧めている。このように学習の支援に多様な技量が求められる時代において、教育のプロセスに関わる知識が実践知として必要であり、ティーチングの専門職化が進むのであって、教える人の準備教育とともにその継続教育が促進されねばならないことについて言及している。

全体を通じて、「教えること」つまりティーチングが、従来の何かを教えるというイメージを超えて、遠隔教育は別として学習者に直接関わりながら、ファシリテーションや学習集団の形成など幅広い学習の援助にまで及んで捉えられている。これまでも、イギリスにおける成人教育のチューターの役割として、何を教えるか以上に、いかに考えるかの指導に重点が置かれ、資料の提示や討論が重視されてきた。そこでは、言語によるやり取りや書くことに力が入れられてきた。本書では、このような歴史的背景についての詳説はないものの、それらをバックにしながら、さらに論理的言語的表現にとどまらず、情動や身体的活動にも目を向けての学習論が展開されている。

以上、学習者に視点を置きながら、その援助として「教えること」がいかに学習を刺激し、様々な見方への気づきをもたらし、自己教育力をつけることを支えるかについて、これまでの多くの論を整理し、提示することによって、研究・実践に役立つ書となっている。原書の分量は索引を入れても257頁であり、決して分厚な書ではなく、むしろハンディな本と言ってよい。そこに、多くの内容が盛り込まれていることによって、一つ一つの章におけるスペースの少なさもあって、記述やテクニカルタームの扱いで、やや簡略であると感じられるところもある。ただ、各章が関連していて重なりも多いので、通して読むことによって理解が進む。

アメリカの成人教育に関する本には、教育方法に関する記述が多く、日本でもノールズ、メリアムのものをはじめ、このところ多くの訳書が出版されている。それに比べると、イギリスの場合、成人教育については哲学、歴史、制度、政治・経済との関連などの書が多く、方法に関する書は、必ずしも多くなく、日本語訳としてもジョン・デインズほかの『おとなが学ぶときに』（全日本社会教育連合会）やジェニー・ロジャーズの『おとなを教える』（学文社）など限られた実用書があった程度であった。成人教育を社会的に位置づけて、その意味を考えることは極めて重要であり、イギリスの成人教育は労働者教育との関連もあって、社会的目的を強く意識したところから、社会科学的アプローチが目立ったのであり、そのことがアメリカとはまた異なった特徴となっている。

しかし、教育の内容と方法は強く結びついているのであり、学習も社会的背景との関連で考察する必要がある。この点で、本書はこれまでのイギリスの成人教育の流れも踏まえながらポストモダン社会を強く意識しての学習論を展開している。批判的教育学は、イギリスの成人教育論にあって、ニューソシオロジーとも結びついて1970年代にかなりの位置を占め、そこではネオ・マルクス主義の影響も見られた。今回の書は、これにポストモダンの観点を入れることで、解放につながる学習として、もっぱら社会に焦点をあてるのではなく、自己の変容と社会

変革をつなぐことへの関心が見られるが、その一方、多様性の前に問題が拡散することへの懸念もうかがわれるのである。これらの問題については、なお論究が必要であり、特に学習内容と関連づけての方法の分析には、まだ検討の余地が大きい。

ジャーヴィス教授は、当初成人教育の社会学的分析で脚光を浴び、その後も国家や政治との関連での考察など、多くの書や論文を著してきたが、学習論にも深い関心を寄せ、社会と関連づけた分析で注目されるようになった。本書の構成を見ても、その観点が強いことがわかる。きわめてエネルギーに満ちた研究者であり、国際的にも飛び回っての仕事ぶりであって、現在、各国で最もよく知られているイギリス成人教育研究者と言ってもよいであろう。私が最初に会ったのは、1980年代半ばにオックスフォードで開かれた比較成人教育研究会議の時であるが、渡邊洋子准教授が解説されているように、1990年代当初来日し、職業教育や健康教育の場を見たいとのことで、いくつかの機関を案内し、またサリー大学に訪ねたり、東アジアの会議で会ったりした。

イギリスの成人教育・継続教育と高等教育は、法の上でも義務教育の初等・中等学校教育とは別になっているように、日本の社会教育と学校教育の区別とはまた異なるところがある。そのことから、本書では義務教育後の教育に共通するものとしての「教えること」が論じられているのである。日本では、近年大学等でのFaculty Developmentへの関心の高まりがあるが、社会教育職員の役割論があり、その養成教育はなされていても、直接「教えること」に関わっている講師・助言者等についての教育は乏しい。それだけに社会教育職員等と講師・助言者との協働関係が重要になるのであり、比較的観点もまじえながらから、この書を読むことが期待される。本書に書かれている日記の学習的意味は日本の生活記録や人生史学習と関連づけて見ることができるし、学習コミュニティについては、共同学習を想起して考察することができるであろう。訳については、文自体は平易でも、テクニカルタームが多いだけに苦労が多かったと思われる。それだけに訳注を多くつける努力が払われていて、読者の理解を助ける本になっている。教育、ティーチング、学習の関係を再考し、現代における「教えること」の意味を確認して、実践に当たるとともに、教育方法についてのさらなる研究を進めるうえで、重要な手引きになるものが訳されたことの意義は大きい。